

クレアラ・アン・ペイター覚え書

萩原博子

序

今から10年前の1966年11月5日、東洋大学における日本ペイター協会第5回
 年次大会で、ペイターの女性像の原型をさぐろうとして、とり上げたテーマ
 は、ギリシャ神話のデメーテルとペルセポネーに具現された女性像と母性像の
 交錯についてであった。おそらくその時は、ペイターの作品には女性の登場人
 物が少なく、かつ個性ある人物として描かれていない。どれも喪服姿のこの世
 ばなれした影法師のような存在という印象しか残さないのは、未亡人であった
 ペイター自身の母親の姿がペイターの意識の底にこびりついていて、その他の
 女性は存在しないも同然だったからという定説¹に挑戦したかったのであろう。
 ギリシャ神話は筆者にとって、実に都合のよい類型化のものさしであった。そ
 の時の研究発表要旨は翌年の日本ペイター協会々報第2号にまとめたのせた。
 しかし、ペイターの身边にあって、彼の母親よりももっと強力な影響力を持つ
 女性の存在なくしては考えられない作品、『宮廷画家の花形』(*A Prince of the
 Court Painters*, 1878)の処理は、その後数年にわたりまことに頭をなやました
 課題であった。一方『ガーディアン誌上批評集』(*Essays from 'The Guardian'*
 1901)に採録されている「ロバート・エルズミア論」(“*Robert Elsmere*” 1888)
 の熱狂的ともいふべきほめ方は、これもまたペイターはどうも女性を蔑視して
 いるらしいという男性のペイター研究家の一方的な推論を裏切る有力な証拠品

1. 植木鍊之助, ウォルター・ペイターの研究 (東京: 弘文堂, 1960), 30頁。

として、どうしても見過すことは出来なかった。ペイターの結婚経験の欠如は性倒錯的傾向の故と単純に公式化することは、あまりにも人間に対する理解と洞察の足りない暴論としてこれは斥けたい。日本で最初にペイターの伝記を書いた工藤好美は、ペイターは生涯独身で、妹たち二人が家政をみていたと記している¹。この二人の姉妹の存在がペイターの結婚と何かの関係はないだろうか。ところが、この二人の妹というのは、実は工藤氏の誤解で、一人は姉、一人が妹である。底本に使ったと思われるベンスン (Arthur Christopher Benson, 1862—1925) の記述には “his sisters” とある²ので、誤訳ではないが、同国人の弟子たちの間では自明であったはずの事柄も、他国の人間が字面だけで判断すると起り得る間違いである。遺族の存命中に出版された伝記には、この種の盲点があることは考慮すべき点である。

そういう事実には気づかぬまま筆者は1968年夏、Oxfordを訪ね、Holywell Cemeteryにある墓の前に立った。W. H. ペイターが生涯そこに所属していたBrasenose College (B. N. C) の図書館で、彼に関わる古文書を見た。幸運というべきか『ペイター書簡集』³を出版すべく、編者のLawrence Evans教授が、ひと通り整理の終わった書類をひとつの袋にまとめておさめ、帰米した直後のことだった。筆者がクレアラ・アン・ペイター (Clara Ann Pater 1841—1910) の手蹟を見たのはこの時が最初である。神経質な W. H. ペイターの筆蹟にくらべ、肉太のいかにも豊かでしっかりした感じの手蹟であった。どうやらその時からクレアラの霊にとりつかれてしまったらしい。1972年6月24日、第11回を迎えた日本ペイター協会の学会で「*A Prince of Court Painters* について」と題して研究発表を行い、同作品の素材および文体の面から判断して、或いはこの短篇はクレアラの筆になるものではないかという推論を試みた。それはあくまで推察の域を出ないものであったが、その頃までには『ペイター書簡集』の公刊、*Robert Elsmere* の原本や、その著者の自伝等を手に入れること

1. 工藤好美, ウォオルター・ペイター (東京:京文社, 1924), 40頁。
2. A. C. Benson, *Walter Pater* (London, Macmillan, 1907), p. v.
3. Lawrence Evans, ed. *Letters of Walter Pater* (Oxford, Clarendon Press)はこの後1970年に出版されたが、B. N. C. 所蔵のクレアラの手紙は採録されていない。

ができ、今からちょうど100年前のOxfordの社会の有様と、クレアラ・ペイターの人間らしい姿が次第に筆者の中に再構成されて来た。1974年再度関西学院大学同窓会館を会場とした日本ペイター協会の学会で「ペイターにおける家長意識——FlorianとMariusの場合」と題して、視点を変えてペイターの作品に反映しているクレアラ像を検討した。

本稿は、要するに、その間に英国訪問をはさむ三回の研究発表要旨の草稿の全部または一部を含むもので、知らぬ間に十年の歳月を費やしてしまった模索と調査の総決算である。些細な事実の発見でも、その時点では驚きであり、喜びであったことを回想しつつ、本稿に展開する研究の独自性を主張したい。筆者は一人の女性の存在が、一人の作家の作品と生涯に与えた影響を過大評価しすぎないように、能う限り客観的な資料の蒐集につとめた。無視されることの多かった女性の存在を確認し、その人間像を再構成することになると、その仕事は想像以上に困難で労するところが大きかった。クレアラ・ペイターについて語ることによって『ルネサンス』(*The Studies in the History of the Renaissance*, 1873)と『エピキュリアン・メアリアス』(*Marius the Epicurean*, 1885以後M. E.と書く)の二つの傑作を主著とする文人W. H. ペイターの人間性をさぐり、これまでの定説となっていたペイター伝の修正もしくは補遺を試み、ペイターの作品を愛する人々にもうひとつのペイター像を提供しようとするものである。

1. 出生と幼年期 (1841—1854)

クレアラ・アン・ペイターは、父リチャード(Richard Glode Pater, 1798—1844)と母マリア(Maria Hill Pater, 1800—1854)の間の二男二女の末子として1841年、Londonの郊外Shadwellに生まれた。長兄(William Thompson Pater, 1835—1887)、姉(Hester Maria Pater 1837—1922)次兄(Walter Horatio Pater 1839—1894)に続く誕生である。この中、次兄、W. H. ペイター(他の同姓の人物と区別するため以後こう書く)と美に対する感受性、古典文学への関心を、もっとも多く分ち合い、創設後間もないOxfordのSomerville Collegeの副学長という公職につき、兄の死後は、姉ヘスターと共にLondonに住んで

厳選された良家の子女のみを教えた。教え子の中にヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882—1941) が居る。¹ モリス (William Morris, 1834—96) やメレディス (George Meredith 1828—1909) と親交があった。²

ペイター家の男子は代々短命で、父リチャードは46才でその生涯を閉じた。一時カトリックだったと伝えられる。家業は医者。この父の弟も祖父もまた医者であった。奇妙な一致でどちらも46才で死んでいる。³ 家には2代の未亡人がいた。⁴ W. H. ペイターの初期の作品に「悲しみの母デメーテル」のイメージが色濃く表われるのはその影響と思われる。父の死後一家は同じ London 郊外の Enfield に移る。W. H. ペイターの子供時代についての資料は少く、妹のクレアラについては、後年『想像画像』第二集に収めるつもりだった自伝小説『家うちの子』(The Child in the House, 1878) の記述に頼るしかない。一家が夏をすごした Kent 州の Fisher Hall はこの作品の舞台となった家のモデルといわれている。「家うちの子」の成立過程については後の章で詳しく述べねばならない。ここでは作品中に表われた妹のイメージにのみ触れておく。何故ならば、クレアラの幼い日の姿として記録されているすべてはこの作品の中にしか見られないからである。そしてまた、凡庸な人間の手になるどんなに詳しい記録よりも、熟達した作者の筆による作品の、さりげない点描の一コマの方が、はるかに真実を語ることを筆者は知っているからである。

……Tears of joy too the child knew, also to older people's surprise; real tears, once, of relief from long-strung, childish expectation, when he found returned at evening, with new roses in her cheeks, the *little* sister who had been to a place where there was a wood, and brought back for him a treasure of fallen acorns, and black crow's feathers, and at finding her again near him mingled all night with some intimate sense of the distant forest, the rumour of its breezes, with the glossy blackbirds aslant and the branches lifted in

1. Evans, *Letters of Walter Pater*, p. xxxiii.

2. Lady de Villiers, *The History of Somerville College* (未公刊) の抜萃による。

3. Thomas Wright, *The Life of Walter Pater* (1907; rpt. New York: Haskell House, 1969), pp. 12—16.

4. Walter Pater, *The Renaissance* (1773; rpt. 東京: 研究社, 1929), p. 175.

them, and of the perfect nicety of the little cups that fell.¹

The Child in the House

(喜びの涙もまた子供は知ってゐて、年上の人々の驚きの種になった。或る時、たそがれに、頬を新しく咲き出した薔薇のやうに染めて、小さな妹が森から帰り、落ちた櫛の実や黒い鴉の羽を大事さうに持ちかへったのを見出したとき、彼は子供心に長い間まちこがれてゐた緊張からまぬかれて、ほんとうに涙を流した。そして彼女を再び身近に見出した心の安らかさは、夜もすがら遠い森、森のそよ風のひびき、風に吹かれながら斜に身をかしげた羽の色もつややかな鶴とさしでた枝、落ちた小さい杯のやうなどんぐりの殻の何ともいへぬ品²のよさに対する或る親しい感じと混りあった。
——工藤好美訳。仮名使い原文のまま)

資料が僅かであるために却ってさまざまの暗示が与えられる。仲の良い兄妹である。兄は非常に感受性が強い。妹は大胆に単身森の奥まで宝探しに遠征するだけの冒険心を持っている。獲得しようと一度心にきめた以上は、たそがれ時になろうとも、手に入れて持って帰らねば承知しない強情さも持ち合わせている。どんぐりに鳥の羽という大人には他愛のない物だが、子供心には兄のためにさがし集めて持ち帰る大切な宝物で、興奮に頬をばら色に染めて居る。周囲の者の心配、殊に兄の待ちこがれている緊張感も知らず、自分の思いを遂げようとする奔放さがある。他面、情熱的な愛情を兄に寄せている。そのひたむきさと、妹を「再び身近に見出した心の安らかさ³」は涙を流したいような情感となって兄の心に忘れがたい印象を刻み込んだ。後年 Oxford の Bradmore Road にヘスターとクレアラを迎えて、一家を構えた時の実感と重り合う心情がここに読みとれるのである。

同じ作品の中にもう一箇所、妹の思い出への言及があるので事のついでに引用する。

Again, he would never quite forget the appeal in the *small* sister's face, in

1. Walter Pater, "The Child in the House", *Miscellaneous Studies* (1895; rpt. London: Macmillan, 1928), pp. 155—6.
2. 工藤好美訳、「家うちの子」、ヴォオルタア・ペイター短篇集（東京：岩波書店、1930）16—7頁。
3. Pater, *Miscellaneous Studies*, p. 150.

the garden under the lilacs, terrified at a spider lighted on her sleeve. He could trace back to the look then noted a certain mercy he conceived always for people in fear, even of little things, which seemed to make him, though but for a moment, capable of almost any sacrifice of himself.¹

(さらに彼は庭の紫丁香花の蔭で袖にとまった蜘蛛におびえたときの小さい妹の顔にあらはれた懇への色を全く忘れてしまふこともないであらう。彼はその後、どんなに小さなことについてであらうとも、ものに怖れてゐる人に対して常にいたいてゐた或る同情、よし一瞬間であれ、殆んど如何なる自己犠牲をも厭はぬようにするらしく思はれた憐憫の情を彼がその時見た妹の顔色にまでさかのぼって辿ることができた。)²

もちろんこの作品は1878年に書かれ、姉妹と上記の場所に一家を構えて後の執筆であるから、いくつかの作中の挿話——例えば愛猫の死ぬ時の話などは幼時の経験というより、執筆の時点での家庭内の小事件も混っている。そのため、前の例はともかく、後の例はあるいは成人後の、そしてもっと具体的な事件の象徴化ととれなくはない。保護者意識、または家長意識の目ざめと受けとれるものであるが、そのことについては後に述べる。

2. Heidelberg滞在 (1854—1869)

1848年に祖母が死んだ。同居していた未婚の伯母は「階段の上から家中に響き渡るような」悲しみの「叫び」⁴をあげ、当時9才の W. H. ペイターと、7才のクレアラは、おとなでも悲しい時は、子供のように泣き叫ぶものだとということを知った。その次に彼らは1854年、母を失って孤児となる。W. H. ペイターは、その前年 Canterbury の King's School に入学していた。長兄は医者たるべく修業中であつた。ヘスターとクレアラは、独身のベッシー伯母 (Aunt

1. *Ibid.*, p. 157.

2. 工藤訳, ウォオルタア・ペイター短篇集, 18頁。

3. Mrs. Humphry Ward, *A Writer's Recollections*, (London: W. Collins & Sons, 1918), p. 124. "How well I remember the devoted nursing given by the brother and sisters to a poor little *paralytic cat*, whose life they tried to save...in vain!"

4. Pater, *Miscellaneous Studies*, p. 157. "The cry on the stair, sounding bitterly through the house..."

Bessey, 本名 Hester Elizabeth Maria Pater, 1793—1862) に伴われてドイツの Heidelberg に移り住んだ。そこでどのような教育を受けたか詳しくはわからない。後にクレアラが、メアリ・ウォードと共に Oxford で二番目の歴史を持つ女子大学 Somerville College for Women (S. C. W.) を創設した際、ドイツ語も教えている。クレアラのドイツ滞在中に身につけた貴重な教養と確認出来る唯一の事実である。それが家庭教師として自活する目的でなされた教育の一端なのか、ごく普通の教養として自然に身につけたものなのか、とにかく何の手がかりもないのである。

一方クレアラの兄は1858年に Oxford の Queens' College に進み、翌年の夏の休暇に Heidelberg を訪れて、姉妹と再会した。「どんぐり」(The Acorn) という詩を作ったのはこの時である。この頃しきりに彼は詩を作っている。しかし彼は Oxford 卒業前にすべての詩稿を焼き捨てた。正確に言えば焼き捨てたつもりでいた。現在は十篇の詩が発見されているのを彼は知らない。¹「どんぐり」には W. H. ペイターとクレアラが共有する幼時の思い出がある。詩作の時代から『ルネサンス』までの間には、哲学の谷間とも呼ぶべき彷徨の時期がある。筆者は『ルネサンス』を形而上学的関心に没頭して詩作を捨てた時代の反動と見なしているので、この中間の時代、その内面をうかがう資料の乏しいこの時期に、大陸へのいわば窓口であった Heidelberg の伯母や姉妹が、アントニ・ワットーを見守るあの画家の姉のような思いで彼を見守っていたと信じたい。芸術家の天分が何時醗酵するか全くわからないままに彼女たちは兄を待った。W. H. ペイターは1862年12月11日に Queen's College を二番で卒業した。甥の学業の成るのを待っていたかのように、母代りのベッシー伯母はその年の12月28日 Dresden でなくなった。卒業に続く二年間の W. H. ペイターの消息と、伯母の死を看取ってから七年半の間のヘスターとクレアラの消息は、あらゆるペイター研究者の努力にもかかわらず、今日なお不明のままである。この伯母は W. H. ペイターが聖職につくことを望んでいたとも伝えられ

1. Samuel Wright, *A Bibliography of the Writings of Walter Pater* (London: Garland, 1975), p. 147.

ている。W. H. ペイターが *Robert Elsmere* (以後 *R. E.* と書く) の主人公のように妥協して牧師となる按手礼を受けなかったことは今日の我々の目から見れば幸いなことであった。しかし、伯母の死は生活を共にしていたヘスターやクレアラ以上に、W. H. ペイターには深刻な精神的打撃だったと推察される。1864年 B. N. C. に彼が地位を得ることができたのはドイツ哲学の知識、主としてシェリング (Friedrich W. Schelling, 1775—1854) やヘーゲル (Georg W. F. Hegel, 1770—1831) の哲学の知識²を認められたためであった。

たしかにこの頃の W. H. ペイターの女性のイメージは母性的なものの残像が多い。『ルネサンス』の中に収められた「ヴィンケルマン論」には「悲しみの母、デメーテル」という言葉があり、有名な「レオナルド・ダ・ヴィンチ論」の中のジョコンダ夫人の叙述にしても、神秘的なイメージはあるが、若さや幼なさとは縁がない。「ミケランジェロの詩」における、ヴィットリア・コロンナも然りである。「大地の母」のイメージ、その深淵のような底知れぬ豊饒さに対する畏怖の念が筆の動きを抑えている感じである。M. E. のメアリアスの母にもそれがあとをひいてはいるが、センリアやフォステイナ皇后の創造にはかなりの成熟と発展が見られる。

W. H. ペイターのドイツ哲学傾倒は「ヴィンケルマン論」(Winckelmann, 1867) で完結する。そのあとはフランス、イタリアに目を転じている。筆者は出世作『ルネサンス』を暗中模索の時代の形而上学的傾向の反動と見なしているので、詩人志望を断念した後の W. H. ペイターに再び詩人的感性の復活を促し、散文詩ともいべき名文を書かせた原動力を、春になって戻って来たペルセポネー達、ヘスターとクレアラとの生活の合流がもたらしたものと想定したのである。詩人ワーズワス (William Wordsworth, 1770—1850) の妹ドロスイとは違った貢献を二人は果した。即ち、詳細な記録どころか、不完全な原稿や、その他一切、W. H. ペイターのイメージをそこなうと判断したものを世に出さないようにしたのである。

1. A. C., Benson *Walter Pater*, p. 9.

2. 田部重治、ペイターの作品と思想 (東京:北星堂, 1965), 7頁。

3. Oxford: Bradmore Road 定住 (1869—1885)

W. H. ペイターが、再びヘスターやクレアラを「身近に見出して、心の安らぎをおぼえ¹」るのは、1869年の夏か秋の頃である。32才と28才の姉妹は、Oxford の Bradmore Road 2番地の小さいが、住み心地のよい家に合流して、以後一生を共に過ごす。この3人は墓を共有する。Oxford の Holywell Cemetery にある墓石の正面には Walter Pater / July 30, 1894とあり、右側面に Clara Pater / August 9, 1910, 左側面に Hester Pater / August 5, 1922の文字がある。正しくいえば、W. H. ペイターの墓ではなく、ペイター三きょうだいの墓というべきである。没年のみしか刻まれてないので、彼女達の年令に好奇心を持ち始めたのが動機で、調べればしらべるほどクレアラについては新しい事実がわかって来た。本稿をまとめるにあたりできるだけ年代順に資料を配列するようにした。

クレアラの生涯を年代的に見れば、3才で父の死、7才で祖母の死、13才で母の死に直面したことになる。ヘスターは彼女より4才年長であったが、1922年まで生きた長寿者ということの他は特記することがない。したがって、末っ子の悲劇をたびたび経験したクレアラが本稿の主人公ということになる。伯母に伴なわれてドイツに渡ったのが、W. H. ペイターの Oxford 入学と同時で、1858年、クレアラ17才、伯母の死が22才、このあと28才までの間は消息不明である。この時期の資料の欠落は一時筆者にクレアラの生涯を扱うことを断念させたくらい絶望的なのである。結局 Oxford 定住後の彼女を追うことにした。成人後のクレアラの人間像を再構成することで、本稿の目的は一応達せられると思う。殊にクレアラと親しい関係にあったメアリ・アーノルド、すなわち後に B. N. C. の研究士ハムフリ・ウォード (Thomas Humphry Ward, 1845—1926) と結婚したメアリ・ウォードが、その自伝『ある作家の思い出』(A Writer's Recollections, 1918) に、かなり詳しくクレアラを描いてくれている。先ず、そのた

1. Pater, *Miscellaneous Studies*, p. 156.

いそう魅力のある Bradmore Road の家庭と、その雰囲気をつかめよう。

Almost immediately opposite to us in the Bradmore Road, lived Walter Pater and his sisters. The exquisiteness of their small house, and the charm of the three people who lived in it will never be forgotten by those who knew them well in those days when by the publication of the 'Studies in the Renaissance' (1873) their author had just become famous.¹

メアリ・ウォードはこのあと『ルネサンス』についての反響を詳細に述べる。が筆者の目標はさし当ってクレアラ・ペイターが、どのような生き方をとり始めたかにある。今はむしろメアリ・ウォードがクレアラに相当熱をあげているその交際ぶりの方に焦点を移そう。

And the beautiful little house across the road, with its two dear mistresses drew me perpetually, both before and after my marriage. The drawing-room which runs the whole breadth of the house from the road to the garden behind was 'Paterian' in every line and ornament.²

W. H. ペイターの荘重な、重厚な長文の文体に対して、メアリ・ウォードは、淡々とした日常的なびやかさでものを書いているので、筆者は敢えて訳文を附さない。難解としばしば批評される W. H. ペイターからの引用文にのみ訳文をつけるのは、必ずしも英文学専攻でない読者もこれを読むことを予想しての、筆者の譲歩、止むを得ぬ妥協と理解されたい。

メアリ・ウォードの記録はクレアラのみならず、控え目で家庭的なヘスターの面影もよく伝えてくれる。明確に elder sister と younger sister と書き分けているが、この記述が戦前の日本のペイター研究家の目に触れていたならばと惜しく思われる点でもある。次の引用文は同時に室内装飾に関するペイター家の共通の趣味が、すでに定評のあるものだったことを証明する。この Bradmore Road の家は、いわば、彼ら3人にとっては新しい共同生活の出発点だったと信ずるので、ついでに引用しておく。

1. Mrs. Humphry Ward, *A Writer's Recollections* (London: W. Collins Sons, 1918), p. 120.

2. *Ibid.*, pp. 123-4.

There was a Morris paper; spindle-legged tables and chairs; a sparing allowance of blue plates and pots, bought, I think, in Holland, where Oxford residents in my day were always foraging, to return, often, with treasures of which the very memory now stirs a half-amused envy of one's own past self, that had such chances and lost them; framed embroidery of the most delicate design and colour, the work of Mr. Pater's elder sister; engravings, if I remember right, from Botticelli or Luini, or Mantegna; a few mirrors, and a very few flowers, chosen and arranged with a simple and yet conscious art. I see that room always with the sun in it, touching the polished surfaces of wood and brass and china, and bringing out its pure, bright colour. I see it too pervaded by the presence of the younger sister Clara, a personality never to be forgotten by those who loved her.

メアリ・ワードがこの自伝を書いていた1914年頃には、W. H. ペイターは既に他界して十数年、クレアラも、1810年に急逝している。80才に近いヘスターのみまだ生存していた。それでこれだけ記憶していられたのは、メアリ・ワードの記憶力のよさばかりでなく、ペイター家の三きょうだいの醸し出す家庭の雰囲気、清純、繊細、明朗、清潔という要素に加えて、文筆家志望の若くみずみずしい魂の美的渴望を十分に満たしてくれる何かが、調和のとれた魂の音楽の諧調ともいふべき“*exquisiteness*”が具現されていたからであろう。W. H. ペイターの弟子たちも、多かれ、少なかれこのとりこになった人々であった。このような雰囲気づくりに、ヘスターやクレアラが積極的に参画しなかったとは到底考えられないのである。

ここで附言しておきたいことは、ペイター三きょうだいの Oxford 定住の年があるいは1869年より早いのではないかと思われるふしがある点である。メアリワードがクレアラに初めて出会った時、彼女は24才か25才だったと記述しているため、従来のペンスンを根拠とする年代のずれが3年乃至4年になってしまうのである。しかし現存するペイターの書簡のうち1869年夏以前のものはすべて B. N. C. 発信になっているため、定説をくつがえす客観的な証拠とは

1. Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, p. 124.

ならない。クレアラより10才も若いメアリ・ウォードの思いちがいか、更に推察出来ることは、クレアラが実際の年齢より若く見られる容姿の持ち主だったということになるであろう。

姉のヘスターの方は、どうやら家の中を美しく整え、客をもてなし、主婦の役割を果す立場に満足して安住したように思われる。メアリの夫となった T. H. ウォードも、この頃の W. H. ペイターの客に対する心づかいのこまやかさを日記に記している。メアリを感動させた、芸術的なそしてやや異国趣味の器物のある物は、B. N. C. の私室から新しい家に手づから運び入れたものであった。自ら献立表を吟味するほどの気のつかい方と、室内装飾の念入りな趣味のよさ、青と白の色調に統一された配色の美しさは、当時自宅に招かれた友人たちの心をひきつけずにはおこななかった。『家うちの子』の中に繰り返される家というものの安定性、家族と分ち合う静かな喜びを、この時代の W. H. ペイターは存分に味わったと思う。ヘスターはコーヒーの入れ方も上手だった¹。

4. Somerville College 創立委員 (1873—1881)

姉のヘスターにくらべて、クレアラは積極的に自分の人生の自立を求めた。Oxford 定住後のクレアラは、その母とも、伯母ともちがう生き方を必死に求めていた。教育を受けた女性の職業が、住み込みの家庭教師だけという時代ではすでになかった。ブロンテ姉妹が私塾を開く計画をたてて Brussels に赴いたのはこの数年前である。少数ながらも女性が教壇に立つ機会を提供する学校も増えつつあった。一方にメアリ・エヴァンズ (Mary Ann Evans, 1819—80. 筆名 George Eliot) のように文筆家として自立を成し遂げた女性もいた。W. H. ペイターが、『ルネサンス』の執筆に両三年余りをかけている頃、クレアラのラテン語・ギリシャ語の勉強が進められていたようである。メアリ・ウォードの記述を見よう。

Then after some years, she (=Clara Pater) began to learn Latin and Greek with a view to teaching; and after we left Oxford she became Vice-President

1. Lawrence Evans, *Letters of Walter Pater*, p. xxxii.

1

of the new Somerville College for Women.

教えるためという目的があったことを、メアリ・ウォードは明言している。その時代の Oxford に、はっきりした資格制度があって、それを目ざしての勉強という風には考えられない。筆者はむしろ W. H. ペイターの『ルネサンス』発表後の毀誉褒貶が、クレアラの古典語学習熱に火をつけたような感じを持つ。『ルネサンス』に述べた思想を異教主義ときめつけられ、第二版から、問題の「結論」を削除した失意の兄が、ギリシャ神話の世界に逃避し、沈潜した時に、兄おもいのクレアラが手をこまねいたまま座視していただろうか。

1875・6年頃から、Oxford にも新しく女子大をつくろうとする計画があったようである。クレアラの親友のメアリ・ウォードはその頃、午前中は Bodleian Library で読書し、夜は小説家を志して何か書いていたらしい。午後の時間は女子大創立委員会の会合のために空けてあったという。²『アミエルの日記』の英訳を始めていたようでもあるし、知的好奇心のおもむくままにルナンの『イエス伝』などと取り組んでいる。敏感なクレアラは文筆家としてまたは翻訳家として自立することを考えないわけではないが、兄を教師としてギリシャ語、ラテン語の勉強を志す方が好ましいと考えた。W. H. ペイターが、クレアラの仲間の教養に関心をもったと見られる一例として、*M. E.* の中に、さりげなく使われている“blue stockings”の一語は無視できない言葉である。

The very finest flower of the company …… Aurelius with the gilded faces borne before him, a crowd of exquisites, the empress Faustina herself, and all the elegant blue-stockings of the day, who maintained, people said, their private “sophists” to whisper philosophy into their ears winsomely as they performed the duties of the toilet……was assembled again a few months later, in a different place……³

前章で述べた人々のうち更にその花とも仰がれた男女が数ヶ月後、異った場所で、極めて異った目的のために、再び集った。オオレリアスは鍍金した束桿をおのが前に

1. Mrs. Ward, *A Writers Recollections* p. 124.

2. Enid Huws Jones, *Mrs. Humphry Ward* (Heinemann, 1973), pp. 53—5.

3. Walter Pater, *Marius the Epicurean* (1885; rpt. London: Macmillan, 1924), p. 157.

運ばせて出御し、伊達者のなかにはフォスティナ皇后の姿も見えていた。化粧する間微妙な哲理をきくためにお囲いの哲学者を養っていたと言われる優雅な青踏者流も皆そろった。² — 享楽主義者メアリアス 工藤訳

どの時代にも、どこの国にも非常に強い知的要求をもつ女性たちは存在していたし、また存在するものである。ローマの貴婦人が、「お囲いの哲学者を養っていた」³ように、W. H. ペイターが妹の古典語学習に関わるのをたのしまなかったといえは嘘になりそうである。前述のメアリ・ワードの記述と一致する点は、旺盛な好学心をもつ女性のイメージである。クレアラがS. C. W.の開学当初からラテン語、ギリシャ語、ドイツ語を受け持ったことは確かだが、どの程度の実力だったか、どんな教材を扱っていたかまではわからない。W. H. の著作年表を見ると、ギリシャ神話に関する講演や研究が年に大体一篇の割合で現われている。またM. E. の中に採り入れられた、ギリシャ文学や、ラテン文学の引用の多さ、殊に作中人物Flavianと一緒に読んだ「キューピッドとサイキー」⁴の物語は、殆んど全部が入っており、共に読書するよるこびが語られている。Flavianを女性にすればクレアラではないか。

クレアラは望めば、美術史の勉強をしてもよかったのである。たとえヴィンケルマン (Joachim Winckelmann, 1717—1768) のような晩学になったとしても、目の前の兄は教師として何の不足があろう。しかし『ルネサンス』発表後、道徳上の非難とは別の立場から、歴史上の誤りを指摘した女性がいた。OxfordのLincoln Collegeの学寮長マーク・パティソン (Mark Pattison, 1813—1884)の夫人エミリアである。彼女は若いメアリ・アーノルドを魅了した女性のひとりでS. C. W.の創設委員でもある。後に『フランス美術史』⁵(*The Renaissance of Art in France*, 2 vols. 1879)を著した。クレアラが美術史よりは

1. blue-stocking の訳語を“青踏”としたのは平塚雷鳥 (1886—1971) である。平塚雷鳥, 平塚らいてう自伝 (東京: 大月書店, 1971), 299頁。
2. 工藤好美訳, 享楽主義者メアリアス (東京: 国民文庫刊行会, 1926), 234頁。
3. Pater, *Marius the Epicurean*, p. 157.
4. *Ibid.*, pp. 45—67.
5. Evans, *Letters of Walter Pater*, pp. xxxiv—v.

古典語をえらんだのがどういう動機であったにしろ、将来の担当教科への配慮が入っていなかったとは断定しきれない。むしろ目標がはっきりしていたからこそ、W. H. ペイターも、きょうだい愛と保護者意識にもえて、これを支援したと判断する方が自然である。メアリ・ウォードがマシウ伯父 (Uncle Matt; Matthew Arnold, 1822—1888) を意識して、しきりに背伸びしたように、クレアラも兄の保護と協力のもとに少しずつその才能を開花させつつあった。このような環境を背景に考え合わせると、1875年の「デメーテルとペルセポネー」についての講演旅行、(*Demeter and Persephone*, 翌1876年 *Fortnightly Review* 1, 2月号掲載), 「ディオニュスス研究」(*A Study of Dionysus*, *Fortnightly Review* 12月号), 「エウリピデスのバックス」(*The Bacchanals of Euripedes*, *Macmillan Magazine* 5月号), 1880年の「ギリシャ彫刻の初め」(*The Beginning of Greek Sculpture*, *Fortnightly Review* 2, 3月号), 「アエギナの大理石」(*The Marbles of Aegina*, *Fortnightly Review*, 4月号) と続けざまに書かれた一連のギリシャ研究の論文は、クレアラの古典語熱と切り離しては考えられない。『ルネサンス』の不評にきずついた W. H. ペイターが、ギリシャに目を向けた発端は、どちらが先ともいえないが、クレアラの勉強との相互作用の結果と想定してみるとはできないだろうか。

「デメーテルとペルセポネー」に関しては殊に注目する理由がある。知らず知らずのうちに、クレアラの友人の女性たちが、ペイター家の客間に集まるようになっていた。その中には、前述のパティスン夫人の他に、メアリ・ウォードの紹介したヴァーノン・リー (Vernon Lee 1856—1935, イギリス名 Violet Paget) もいた。ペイター家の客間は Oxford の “blue-stockings” 達に占居されることもあったであろう。もはや “widow mother”² のイメージに固執してばかりいられない。必然的な環境の変化は時間の経過と共に、やがてペイターの女性観は当然ある影響を与え、彼の描く作品の中の女性像にある変化があらわれずにはすまなかった。講演ぎらいのペイターが珍しく Birmingham および Mid-

1. Jones, *Mrs. Humphry Ward*, p. 36.

2. Pater, *Marius the Epicurean*, p. 8.

land Institute で1875年12月に講演を行っている。「デメーテルとペルセポネー」はその時語られた草稿である。筆者はペイターの女性観の転換期を示す作品として重要視したい。W. H. ペイターの特徴として、男性でも女性でも、決してドラマティックな動きの多い人間は描いていない。ただこの頃を境にして「思索する女性」が作品に登場しはじめるのである。

5. Somerville Hall 副学長 (1881—1894)

S. C. W. は1878年、最初 Somerville Hall という名称で発足した。メアリの夫 T. H. ウォードが、かつてイタリアで知り合った女性の数学者で天文学者だった Miss Mary Somerville の名に因んだ名称を主張した¹。その一年前に Oxford 最初の女子大学 Lady Margaret Hall が、英国国教会主義を旗じるしとして開学していた。かねて創設委員会を設け、Cambridge の Girton College を見学に出かけたりしていた Somerville 派の委員たちは急がねばならなかった。彼女たちはかつて Oxford Movement の際、Christ Church 派の国教主義、(Anglicanism) の保守性と権威主義に烈しく対立した自由主義陣営 Balliol College や Lincoln College の教職者たちの娘であり、妻であり、姉妹であり親しい友人たちであった。教条主義にとらわれない自由な立場をとり、数学や天文学のような当時としては進歩的な学問をその教科に組み入れようとした。事實はメアリ・ウォード自身が入学試験問題を作るというような発足をしており、この委員会はいつも “poverty-stricken” であった。彼女らはそれぞれ分担して課業を教え、校内の雑務を処理した。それでも『教養と無秩序』(Culture and Anarchy, 1869) の中で、マシウ・アーノルドが説いた理想主義を彼女たちは具現してみせねばならない。クレアラは機械的な語学教師に留まらず、Hellenism の精神を、学生たちに教え開眼させ、“sweetness and light”² の世界へ伴わなければならない。メアリ・ウォードの妹で、後にハックスリ兄弟の母となったジュリア (Julia Arnold Huxley, 1862—1908) が第一回生の中

1. Jones, *Mrs. Humphry Ward*, p. 53.

2. Matthew Arnold, *Culture and Anarchy*, (1869, rpt. 東京: 研究社, 1937), pp. 5—40

について、ギリシャ語の作文で首席を占め続けていた。

Several generations of girl-students must still preserve the tenderest and most grateful memories of all that she was there, as woman, teacher, and friend. Her point of view, her opinion had always the crispness, the savour that goes with perfect sincerity. She feared no one, and she loved many, as they loved her.¹

クレアラは開学当初から tutor として教えていたが、メアリ・ウォードがその夫と共に London に移った1881年から副学長となった。40才であった。この時から兄 W. H. ペイターの死まで約15年その職にあった。学内に居住して週末だけ Bradmore Road の家に帰っていたらしい。一時休暇中の学長のフランス婦人の留守中、代行としての責任を負ったこともある。

当時の Oxford では、W. H. ペイターの『ルネサンス』でさえ、新風を吹き入れたという称讃と同じだけの非難を保守的な人々から受けねばならなかった。発足後二年のこの女子大を、あれほど熱心に支えていたメアリ・ウォードが去らねばならなくなったのは、メアリ自身の筆禍事件が遠因と考えられなくもない。小説家を志す彼女は処女作 *Milly and Olly* (1881) を発表したあと、「不信仰と罪」(Unbelief and Sin) というパンフレットを無記名出版した²。後の *R. E.* のもっとも早い時期の習作ともいべきものでふたりの大学生の対話篇である。無記名は違法というので本屋の店頭から撤去させられ、メアリはそれを知人に配ったが、これがきっかけとなってウォード夫妻は陰湿な Oxford の雰囲気に見切りをつけた。1880年頃まで Oxford では fellow または tutor の身分で学寮内に起居する学者たちは結婚することがなかった。T. H. ウォードはメアリ・アーノルドと結婚する時に、牧師をしている父親の了解を得て B. N. C. を辞任している³。たまたま彼が Times 社からよい地位を提供された時であったので、夫妻は遂に“脱出”に踏み切った。ウォード夫妻流出のあと、新しい女子大の運営の責任の大きな部分はクレアラに移った。メアリ・ウ

1. Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, p. 124.

2. Jones, *Mrs. Humphry Ward*, p. 54.

3. *Ibid.*, p. 42.

ォードが心からクレアラに感謝したのは当然である。

前述のような Oxford の不毛性、さまざまな保守性や、倦怠した退廃感を考え合わせると、新しい女子大の誕生はそれ自体かなり epoch-making な事件であった。現代の Somerville College の卒業生は、男性と対等の学位も得られない花嫁学校と大いに酷評するのだが、筆者は、当時の blue stocking たちのたくましさをもっと評価したい気がする。マックス・ビアボウム (Max Beerbohm 1872—1956) の『ズレイカ・ドブソン』(Zuleika Dobson, 1911) の書かれるはるか以前に、ストア哲学者の皇帝の講演会場ではなく、Shelidonian Theatre の公開講演の席に、「当代の花とうたわれる¹」女子学生の群を設定すると前述した M. E. の引用文は、もっとも痛烈な W. H. ペイターの状況描写と考えられないだろうか。クレアラはその blue-stockings の仲間の中心に見出される。ペイター家の一員は、アーノルド家の一と¹その地位を交替した。

「家うちの子」や M. E. の中に、W. H. ペイターの家父長的な意識がちらつくのは従来考えられていたように長兄の死によるものではない。たしかに死の瞑想はしばしば彼の作品のテーマであるが、「家うちの子」の場合は、その執筆年代から想定しても、Bradmore Road の家庭の安らぎ、流謫の生活から戻った旅人の安全な場所 “chez soi” を得たよろこびこそがその基調となっている。共有する幼年期の思い出をたしかめ合いながら、無意識的にヘスターやクレアラもこの創作に参画している背景がある。クレアラが S. C. W. の resident tutor となった頃から、二世紀のローマを舞台とする歴史小説の構想ができ、1880年には B. N. C. の fellowship を辞して、大作の完成に力を傾けることにした。この作品には、ふたりの有力な女性の登場人物がいる。マーカス・オーリーリャスの妃、フォオスティナのきらびやかな衣裳や、冠の宝石のきらめきを描く時、クレアラの衣裳の趣味のよい服を思い浮かべなかつたであらうか。ヴァノン・リーは、その美的センスのよさを絶賛していた。女子学生の群の中で指導的役割を果たしつつあるクレアラのことが脳裡に浮かぶ時、そ

1. Pater, *Marius the Epicurean*, p. 187.

2. Evans, *Letters of Walter Pater*, p. xxxvi

れは、セシリアの家の教会のイメージとも重なる。*M. E.* に登場する女性には、今までに作品に現われたどの女性より、ふくらみが出て来ている。

M. E. の成功により、*W. H.* ペイターは一家を London の Earl's Terrace 12番地に移した。1879年の数週間を、*S. C. W.* の初代学長の休暇中の学長代行として手腕を発揮したクレアラは、1885年の三学期間、再度の休暇をフランスに過す *Mme Shaw Lefevre* 学長の代行をつとめた。*W. H.* ペイターの *B. N. C.* での地位は責任のないものだが、*S. C. W.* を屢々訪ね、客員のようなかたちで図書館の委員をしていることが、*S. C. W.* の記録にのこっている。兄も妹も、週日は Oxford, 週末や、休暇中は London という生活を繰り返している。1887年に長兄が亡くなり、同年出版された『鑑賞論集』(*Appreciations*) には、ラテン語の追悼文を附して長兄 William Thompson Pater に捧げられた献辞がある。1889年には *S. C. W.* で学長選挙があつて Miss Maitland が第2代学長となった。クレアラは副学長のままである。

M. E. と同じ年、*Macmillan Magazine* 10月号に発表された作品には解きがたい謎がある。*W. H.* ペイターに期待をかけた古典語学者 ジャウエット (*Benjamin Jowett, 1817—1893*) の幻滅を下敷にしたような師弟関係が見られる。ギリシャ語教師クレアラならこういう関係を公平に眺めることも可能なはずである。ワットオの不肖の弟子、ジャン・バプティスト (ペイター) が、彼らの祖先と信じられていたとすると、「宮廷画家」は、実にさまざまの暗示に満ちた作品となる。「家うちの子」にも同様なことがいえるが、両者を比較した場合は、何と云っても女性が主導権を持っていることが大きな特色となっている。そういえば本人の知らぬ間にパリ遊学の手配をしてやったり、貧しい生活にあえぎながらその才能をみがき、認められる機会をさがしているワットオに深い同情を示す女主人公の思いは、クレアラの教師経験を通して、初めて生きた個性となって描かれているのではないだろうか。筆者が「宮廷画家」は、もしかしてクレアラが原作者ではないかと疑ったのは以上の理由による。成功して有名になったワットオが、パリの貴婦人連にもてはやされるのを、不安な気持ちで眺めているのは、*S. C. W.* に釘づけにされながら Earl's Terrace の賑わい

を思う時のクレアラの心象風景ともとれるのである。W. H. ペイターが、女性の心情をこのように描けた故に却ってクレアラとの合作かと疑われる。しかしメアリ・ウォードに “intelligent, alive, sympathetic with a delightful humour, and a strong judgement, but without positive acquirement¹” と評されたクレアラは、この疑惑を決して解きあかしてはくれないであろう。

1893年夏、ペイターきょうだいは再び Oxford に戻った。S. C. W. にも B. N. C. にも等距離の St. Giles 64番地に居を定めた。翌年の夏 Glasgo 大学で名誉学位を受けるための旅支度もなかばで、7月30日に W. H. ペイターは急逝した。心臓発作で階段の途中で倒れかけた兄は、クレアラに抱きとめられ、彼女の腕の中で息をひきとったのである²。その家は現在 Black Friars の修道院になっている。

1894年の夏、彼女は実にぎっぱりと S. C. W. を去り、兄の名声の守護者となって生前の兄の協力に報いた。後年彼女の教え子が回想するところによれば、クレアラは大多数の学生にとってはきびしい教師であったという。色彩や言葉の美しさに鋭敏な神経の持ち主は、同じ “rare and delicated spirits³” を学生たちに要求したのである。

6. London: 晩年 (1894—1910)

W. H. ペイターの死は全く突然の死であった。その直後にクレアラの書いた手紙が B. N. C. の図書館に保存されている。一通は次の通りである。

5 Alfred Street / Sep. 14

Dear Mr. Butler, / The things we are giving to leave in the college, are the carpet, curtains, sofa, chairs, window cushions, long table, book-case, scuttle (not fender) and everything in the bed-room. Should we send a Valurz, or is that done by the college? Thank you for your letter. We leave Oxford

1. Mrs. Ward, *A Writers Recollections*, p. 124.

2. Mrs. Ottley, *The Somerville Students Association Report of 1910*, 1910.

3. Edmund William Gosse, *Critical Kit-Cats* (1896, 3rd ed. London: Heinemann, 1913), p. 261.

on Monday morning. / Yours sincerely, / C. Pater

The things inside the drawers we wish to give to Walker —

他の一通は判読しにくい箇所があったが、次の通りである。句読点を変えてない。〔 〕内はクレアラの手蹟ではない。

5. Alfred Street / Sep. 15 [1894]

Dear Mr. Butler, / We found the keys, that is two keys, which the porter said were the keys of the Library & the New gate, and put them in the table drawer where the others are. / The things in the drawers, are all clothing of various kinds; these & the books, & some coats in the hanging cupboard, we have told Walker he may have—In the cupboard two are hanging a gown & cap, surplia & two hoods, which we have asked Mr. Bussel to take — May they remain there till he comes up, or else he put in his room. Thank you for seeing to the valuation. / Yours very truly / C. Pater.

以上の二通の手紙でわかることは、臨終を迎えた St. Giles 64番地の家ではない場所に滞在していること、しかしこれは Somerville Hall の所在地ではない。St. Giles 64番地を引き払ってから一時滞留したものらしい。次の London からの手紙が、まだすっかり落ちつかないながらも、没後出版の『ギリシャ研究』の進捗状態を告げている。クレアラがこれに特別関心を持っていた理由は前に述べた思い出がまつわるからである。

6 Canning Place / Kensington W / Oct. 10

Dear Mr. Butler, / Will you kindly give the china & glass you speak of to Walker The above is our permanent address so will you send the cheque here, made payable time, as I am administrating. / We hope *a volume of my brother's essays will be brought out this autumn.* There is to be a vinette portrait as frontispiece done from a photograph—finding from our specimen we have seen it will be a very excellent likeness—it seemed to us better than the photograph— / We are still in a good deal of confusion, but when we are settled should be so pleased to see you if you were in this neighbourhood at any time. / With my sister's kind regards to yourself & Mrs. Butler. / Believe me / Yours, very sincerely / Clara A. Pater.

B. N. C. に残る手紙の中、最後のものは、簡単な事務的なもので、£33. 5.

10の受領証を同封したものである。受けとりの方には Clara Ann Pater とフルネームの署名がある。

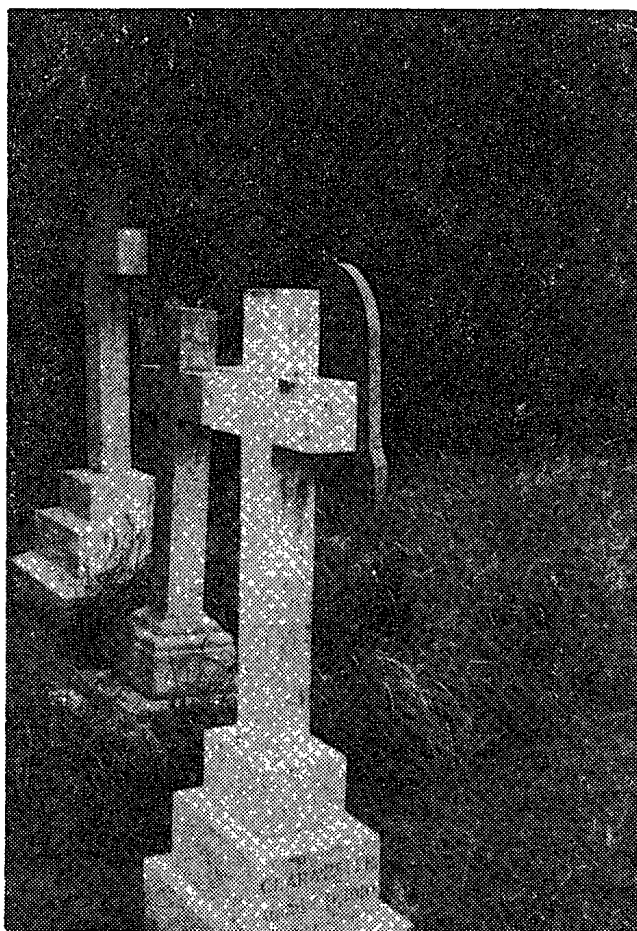
6 Canning Place/Kensington W/Oct. 12

Dear Mr. Butler/I enclose the script, with many thanks to give you all the trouble you have taken—/Yours very sincerely/C. A. Pater.

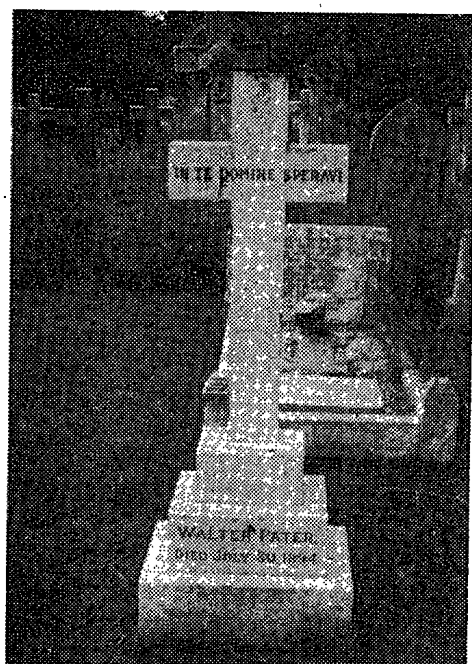
『ペイター書簡集』を編集した Lawrence Evans 教授は、何故か B. N. C. にあるこの4通はそのままにして、Bodleian Library 所蔵のクレアラからゴス (Edmund William Gosse 1849—1928) 宛の一通¹だけを収録している。たしかにこれは資料的価値からいっても、絶筆となった「パスカル論」の原稿の引き渡しを拒んでいる点『ギリシャ研究』の評判のよいのをよろこんでいる点などですぐれている。筆者はクレアラの零細筆墨を惜しむため、原文を記録に残した。他に2通大英博物館にあるという手紙を筆者は見えていない。

クレアラが兄の死後、再び S. C. W. に戻らなかったことは同校史の記録によっても明らかである。ヘスターとクレアラの生活は、W. H. ペイターの遺族として B. N. C. から受ける年金と、彼の著作の収入によった。再び、Heidelberg 時代に戻ったような二人の生活である。W. H. ペイターの没後に出版された二つのエッセイ集の編集は、親しかった友人のシャドウエル (Charles Lancelot Shadwell, 1840—1919) があたった。またペイター伝を書くための諒解を求めた人物が二人、姉妹の前に現われた。一人は Cambridge の学者ベンスン、もう一人はトーマス・ライトである。前者に対して姉妹は好意的であったが、後者の申し出は斥けた。それにもかかわらずライトは我流のペイター伝二巻を書き上げ、今日どちらの伝記を採るかは、しばしば問題とされる。ベンスンの模範的教師像のようなペイター伝にあき足りなくてという声はあるが、ライトの記録のまとめ方が充分生前のペイターを描いているとは思えない。強力な後楯を失ったこと、研ぎすまされた美意識と、美しいものに感動する鋭敏な感受性を、共に分かち合うことのできる相手を、永久に失ったクレアラの寂寥はどんなであったろう。兄の死後も、Bloomsbury group との交流は続いていたであろう。

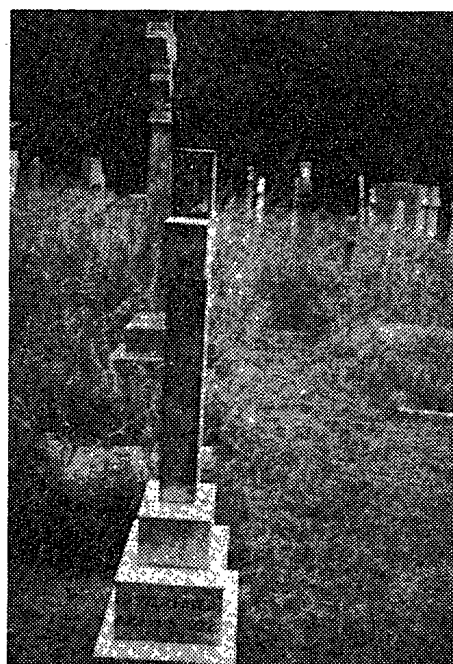
1. Evans, *Letters of Walter Pater*, pp. 156—7.



クレアラ・アン・ペイターの墓



前面はW. H. ペイターの墓
墓碑名は詩篇31 : 1, 14



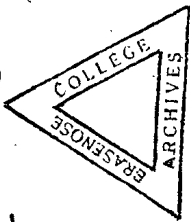
クレアラの反対側にヘスター・ペイター
の名前が入っている。

クレアラ・アン・ペイターの筆跡

6 Canning Place

Newington W

Oct. 10



W.H. Pater

Dear Mr. Butler

Will you kindly give the china & glass in respect of to Walter. The above is our permanent address so will you send the cheque here, made payable to me, as I am administratrix. We hope a volume of my brother's classical essays will be brought out this autumn. This is how it

is quite a portrait as frank's seen from a photograph - judging from one specimen we have seen it will be a very excellent likeness - it seemed to me better than the photographs.

We are still in a good deal of confusion, but when we are settled shall be so pleased. Dear you if you were in this neighbourhood at any time.

With my sister's kind regards to myself & Mrs Butler
Believe me

Yours very sincerely
Clara A. Pater

う。個人的に、えらばれた家庭の子女のみを教える私塾に、V. ウルフが加わったのは、彼女の父スティーブン (Sir Leslie Stephen, 1832—1904) と W. H. ペイターの交際を抜きにしては考えられない。そして時は流れ、V. ウルフは、独自の、そして有力な意識の流れの手法を完成して、20世紀英文学の主導的な立場を確立した。筆者はウルフの側からのクレアラへの言及はないかと、かなり捜してみたが、まだ発見していない。

再びメアリ・ウォードのクレアラ追悼の記録に戻らねばならない。

After Walter Pater's death, Clara, with her elder sister, became the vigilant and joint guardians of their brother's books and fame, till, four years ago, a terrible illness cut short her life, and set free, in her brother's words, the 'unclouded and receptive soul.'

S. C. W. の同窓会誌 (*Somerville Students' Association Report*, 1910) はクレアラ追悼号を出した。開学以来のクレアラの副学長という地位については次のように同情的である。執筆者は後にヘスターの遺産管理を任された女性である。'It could not have been an early task for anyone of her age and natural dominance of character to fit at once into a subordinate position; but she did it with a grace and dignity all her own.' たしかに40才にもなって初めて仕事をもったという点や、学長ではない立場について、兄の死後までその職に留まろうとしなかった理由にはなる。ヘスターが今度は保護者的見地から隠退を勧めたであろうことも肯ける。同じように "It was also perhaps not easy for Miss Pater to live in a bustling, vigorous community at all. She was by nature shy and reclusive and sensitive." と書かれている箇所もある。もしかしたらクレアラは彼女の "rare qualities of sympathy and insight." を別の方向に活かした方がよかったのかもしれない。

ヘスターは、一族のすべての者が死に絶えたあと、ペイター家の人間として例のない長寿を保って1922年8月、85才で没した。長寿の悲劇というべきかペ

1. Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, p. 125. 'unclouded receptive soul' は M. E. の最終章への言及である。

ペイターの作品の売れなくなった晩年の一時期、W. H. ペイターの弟子のひとりエドモンド・ゴスの尽力で £50.00 の年金の増額を得ている。因みにペイター家の最後の一員が世を去った年は、エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1873—1965) の『荒地』(The Waste Land, 1922) が出版された年である。東西文化交流史めくが、その年、矢野峰人はシベリア鉄道で、英国 Cambridge に向かい、西脇順三郎は London に到着している。平田禿木 (1873—1943) が Oxford から帰朝したのはその十数年前になる。それぞれペイターの作品のもつ魅力にとらえられた人々であるが、三人の中、作者の生前親交のあった人に接しようと空しく動き廻った痕跡のあるのは平田である。筆者は平田→田部のルートで、ペイターがいどこに失恋したらしい話や、晩年のペイターの看病にあたった婦人に平田が会った話を耳にした。後者は S. C. W. の創設委員の一人で、夫 T. H. グリーン (Thomas Hill Green, 1836—1882) の死後、看護学を学んで資格をとったシャロット (Charlotte B. Green née Symonds, 1842—1929) ではないかと思うが、現在ではもはや確かめるすべはなくなった。クレアラは平田が Oxford にいた期間 (1903—1909)、まだ存命していた。

結 語

作家およびその作品の研究にともなって、一体どれだけのことが理解されたら充分といえるであろうか。その作者の生きた時代とその周辺を全く知ることなく、ただ作品のみ精読してもそれだけで充分の研究ができたとはいえない。しかし、ペイターの周辺を探ろうとすれば、少くとも Oxford Movement を中心に英国の宗教界の事情と、長くあとをひいたその余波を無視することはできない。筆者は強引にも、Oxford の Holywell Cemetery に静かに眠っていた、クレアラを起し、この国にひきずって来てしまったようである。クレアラはその兄と共に、キリスト教に対して、ヘスターよりは自由な見解をもっていたのではないかと想像する。その古典的教養も、もし一括して Christian

1. Evans, *Letters of Walter Pater*, p. xxxvi.

2. *Ibid.*, p. 103, f. 3.

Humanism の流れの中に入れてしまえば、何のことはない、当時の Oxford の雰囲気、教条主義への反逆に過ぎなくなってしまうのではないか。ここに詳しく書くひまはないが、Balliol, Lincoln 両学寮の系統の学者達の中にはかなり急進的な人間がいた一時期があり、殊更とりたてて若き日のペイターの思想に反キリスト教的要素を認め非難する必要はなかったではないかという結論になりかねない。W. H. ペイターの死後、ヘスターがその点の擁護に最も神経質になっていたのではないかと筆者は思う。クレアラにとってもそれが制約にならなかったかどうか、兄の生存中にくらべたら彼女の知的好奇心はずい分損をしたのではないかという気がする。

想像や推測が先走らないように、つとめて客観的資料に目を通した。その中で、Somerville College の現学長 Barbara Craig 女史の御好意で、現在同校誌執筆中の Lady de Villiers 女史の原稿の一部を見せて頂けたことは、非常に心強いことだった。その中に Mrs. Ottley¹ が同窓会誌に寄稿した追憶文の一部も転載されてあった。筆者が自殺ではないかと一時疑ったクレアラの死因は癌によることも公的な記録として確認した。性格や趣味、色彩感が格段にすぐれていた事も再確認した。W. H. ペイターの作品の中からクレアラ像を捜す努力に緊張し切っていた筆者が、ひとつだけその落差のはげしさに愕然とした事は、クレアラの教え子たちの描くイメージが、無理もないごととはいえ、その透視力において、眼の高さにおいて、あまりに可視的な次元に限られていることであった。結局筆者は一つの実験として、母校東京女子大学の創設者安井てつ(1870—1946)の伝記と本人自筆の書簡に目を通した上で、その教え子の追想文をそれに重ねてみて次のような結論を出した。創設期の学校では、その初期ほど濃密な師弟関係が存在するのは事実だが、教え子のとらえ得る師のイメージはほんの一部に過ぎない。むしろ同時代を共に生き同質の感受性²を持ち、その環境を熟知した人間の記録の方が適確さにおいてはすぐれている。こ

1. ヘスターの遺産相続者。1939年没。

2. 竹友藻風(1891—1954)「安井哲子先生の思い出」, 安井てつ先生追憶集(東京女子大学, 1966) 50—51頁。短い文章ながらすぐれた“Imaginary Portrait”である。

のことをクレアラに当てはめれば、比較的信頼できるのがメアリ・ワードの記録であり、もっともすぐれた記録は W. H. ペイターのそれでなければならない。前述の安井の伝記を生き生きとさせているもうひとつの要素は、本人が焼却を望んだその親友宛の手紙で、どうしても火中するにしのびなかった受取人が、本人の没後数年も経ない中に信書の秘密を犯す苛責に苦しみつつも、公けの伝記の資料として提供したところに負うところが多い。しかしクレアラには、W. H. ペイターの場合もそうであるが、本人自筆の手紙の類いはまことに少ない。したがってクレアラのイメージはその兄の作品の中に執拗に求めるしかないことになる。いくつかの客観的事実の確認だけはなされたが、全作品の通読は容易でなく、本稿に引用した例の乏しいのは、今後まだ書き加えるべき余白の多いことを意味する。

同時に問題として残るのはクレアラと姉ヘスターの間で、W. H. ペイターの遺稿処理に関して、果して完全な意見の一致を見たかどうかという点である。クレアラは1910年に没し、ヘスターは1922年に、その遺産相続者 (Mrs Ottley) も1939年に没した。後に、あきらかにクレアラの筆蹟で書かれた『ガストン』(Gaston de Latour, 1888) の続きと認められる断片が、他の未発表、未完成原稿と共に Harvard の Houghton Library¹ に1961年になって買い入れられたことは何と考えるとよいのであろうか。これら21点の手書きの草稿は、London W. C. 2番地の Lincoln's Inn の旧館で発見されたと Harvard 側の記録にはある。

(1976年9月4日)

参 考 文 献

青山なを著. 安井てつ伝. 東京: 岩波書店, 1949.

編. 若き日のあと: 安井てつ書簡集. 東京: 東京女子大学, 1965.

編. 安井てつ追想録. 東京: 東京女子大学, 1966.

Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy*. 1869; rpt. 東京: 研究社, 1937.

Benson, A. C. *Walter Pater*. 1906; 2nd edition. London: Macmillan, 1907.

Brake, Laurel. "A Commentary on 'Arezzo': an Unpublished Manuscript by

1. 未出版の手書き原稿のみ保存する図書館である。

- Walter Pater. *The Review of English Studies* ; Vol. 27, No. 107. Oxford : Clarendon, August, 1976. pp. 266—276.
- Chapman, Raymond. *Faith and Revolt: Studies in the Literary Influence of the Oxford Movement*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1970.
- 土居光知 & 工藤好美. 無意識の世界. 東京: 研究社, 1966.
- De Laura, David J. *Hebrew and Hellene in Victorian England*. Austin: Univ. of Texas Press, 1969.
- Evans, Lawrence. ed. *Letters of Walter Pater*. Oxford: Clarendon Press, 1970.
- Fletcher, Iain. *Walter Pater*. London: Longmans, 1959.
- Gosse, Edmund. "Walter Pater". *Critical Kit-Kats*. 1896, 3rd ed. London: Heinemann, 1913. pp. 239—271.
- 平塚雷鳥. 「青踏」の発刊, 平塚らいてう自伝: 元始, 女性は太陽であった. 上. 東京: 大月書店, 1971. 288—344頁.
- Knoepfmacher, U. C. *Religious Humanism and the Victorian Novel: George Eliot, Walter Pater, and Samuel Butler*. Princeton: Princeton Univ. Press. 1967.
- 工藤好美訳. 享楽主義者メイリアス. 東京: 国民文庫刊行会, 1926.
- ウォオルタア・ペイター. 東京: 京文社, 1924.
- ウォオルタア・ペイター短篇集. 東京: 岩波書店, 1930.
- Monsman, Gerald Cornelius. *Pater's Portraits: Mythic Patterns in the Fiction of Walter Pater*. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1967.
- Pater, Walter H. *Appreciations with an Essay on Style*. 1889; rpt. London: Macmillan, 1924.
- Pater, Walter H. *Essays from 'The Guardian'*. 1901, rpt. New York: Books for the Libraries Press, 1969.
- Pater, Walter H. *Greek Studies*. 1895; rpt. London: Macmillan, 1928.
- Pater, Walter H. *Imaginary Portraits*. 1889; rpt. London: Macmillan, 1924.
- Pater, Walter H. *Marius the Epicurean*. 1885; rpt. London: Macmillan, 1924.
- Pater, Walter H. *Miscellaneous Studies*. 1895; rpt. London: Macmillan, 1928.
- Pater, Walter H. *Renaissance*. 1873; rpt. 東京: 研究社, 1937
- 斎藤勇編, 英米文学辞典, 増訂新版, 東京: 研究社, 1961.
- 田部重治訳. 文芸復興. 東京: 岩波書店, 1937.
- 田部重治. ペイターの作品と思想. 東京: 北星堂, 1965.
- 植木鍊之助. ウォオルタア・ペイターの研究. 東京弘文堂, 1960.

Ward, Mrs. Humphry. *A Writer's Recollections*. London: W. Collins Sons, 1918.

Villiers, Lady de. An extract about Clara Pater from *History of Somerville College*.

Wright, Samuel. *A Bibliography of the Writings of Walter H. Pater*. London: Garland, 1975.

Wright, Thomas. *The Life of Walter Pater*. 2 vols. 1907; rpt. New York: Haskell House, 1969.

矢本貞幹. 文学技術論. 東京: 研究社, 1974.